

外界の妖精と幻想郷の妖精の比較分析

えむてー

本稿においては、今現在西洋に残る「外の世界の妖精」と東方作品で描写される「幻想郷の妖精」について、西洋の妖精伝承と東方作品での妖精描写の比較を行った。比較は歴史、容姿、生命力、好みについて行い、その中で特に妖精が幻想郷に来たのは18～19世紀と博麗大結界成立前後の確率が高いことや妖精の生態の幻想郷にとっての都合の良さから、妖精が今の幻想郷成立時に幻想郷のシステムとして組み込まれたという結論に至った。

1. 序論

幻想郷において妖精は毛玉のような精霊よりは数が少ないが、人間や妖怪など他種族よりは遥かに多いと言われている。毛玉は話したり出来ないことであろうことを考えれば、妖精は知性を持った存在の中では幻想郷で最も多い存在とも言える。幻想郷は「妖怪」に関しては原作中で「人間が存在に必要」など色々な言及がされてきた。「妖精」に関しても妖怪並に描写や公式設定が多い。

妖精は種族としての基本的な設定が「東方求聞史記」において文章で記述され、「東方三月精」で光の三妖精の毎日を通じて野生の多少強い妖精の生活について描写され、「東方三月精」「東方儚月抄」などでは勢力に仕える妖精である妖精メイドについて一部で描写されなど、公式作品の中でも描写が多い。名前のあるチルノなどの妖精を除けば、シューティングで自機にボムや通常弾でひとまとめにやられるだけの雑魚、モブキャラである妖精。モブということ言えば、人里の人間などに関しては時折考察を見るが雑魚の「妖精」に関しては公式の妖精の設定で大体語られ尽くしているせいか逆にあまり触れられてきていない。東方

のファンであれば「死んでもすぐ復活する」「人里では妖精で鬱憤を晴らすことが推奨されている」「幼く小さい少女の姿をしている」「数は多い」くらいの妖精に関する認識や知識はすでに浸透している。そこから一歩踏み込んで考察を行うことはけして無意味なことではないだろう。妖精の数は幻想郷の中でも妖怪以上に多い存在であり、幻想郷の主な種とも言える妖精を考察することは幻想郷を考察すること、幻想郷をより深く知ることにも直結するのではないだろうか。そう考え、今回妖精に関して考察をすることとした。

考察に関しては、原作の描写とこちらの世界での妖精に関する伝承や物語を比較参照する形式で行う。幻想郷の鬼が外の世界で伝えられる伝承や物語のように豆をぶつけられるのを嫌うように、妖精の外の世界での伝承を知ることによって幻想郷の妖精の生態などの考察に役立つかもしれない。

2. 妖精の歴史について

「幻想郷には妖精がいつから存在するか」という問いに関して原作の描写のみで答えるのは困難である。原作から確認できるのは、チルノが「東方花映塚」において「60年に1度のお祭りさ！」と語っている部分からチルノは60年前の異変を見ていると推測できるため、少なくとも花映塚異変の60年以上前には生きていた、そのくらいには確実に妖精が幻想郷にいただろうと考えることが出来るくらいで、原作中において妖精がいつから確実に幻想郷に存在したか断言できる描写はその位である。

それに対して「外の世界において妖精がいつから存在するか」と言えばはるか昔、紀元前より存在している。また、妖精はその長い歴史の中で世間一般的な姿や性質のイメージを変えている。多少長く手前味噌で